（参考）

（１）多剤耐性緑膿菌について

緑膿菌は土壌・水中・植物・動物（ヒトを含む）などあらゆるところから分離される常在菌で、ヒト・動物はもちろん、植物にも病気を起こすことがありますが、その病原性は低く、通常は緑膿菌がいても病気になることはほとんどありません。しかし、体の抵抗力が弱った方などでは肺炎や尿路感染症などの原因菌となります。

多剤耐性緑膿菌とは、通常の緑膿菌感染症の治療に使用する抗菌薬がほとんど効かなくなっている菌のことです。日本での定義は、カルバペネム系、フルオロキノロン系、アミノグリコシド系の抗菌薬全てに耐性を示す株とされています。

日本での検出状況は、厚生労働省の院内感染対策サーベイランス（Japan Nosocomial Infections Surveillance:JANIS)によると、2017 年に報告された緑膿菌の中で、多剤耐性緑膿菌と判定された菌株は 184,472 株中 1410 株（0.76%）でした。

（２）感染症の発症と保菌状態の違いについて

感染症の発症とは、病原体に感染した結果、咳やくしゃみ、発熱など、臨床的に問題となる感染症状を呈している状態を指します。一方、保菌状態とは、病原体は検出されるものの、その病原体自体が生体に侵襲を加えておらず、感染症を発症していない状態を指します。